チット＝プーミサックの『アユタヤ時代以前のチャオプラヤ川流域におけるタイ社会』について

尾　中　文　哉

第一章　序

第一節　本稿の目的

本稿は，タイの歴史学者チット＝プーミサックの数多い業績のうち，欧米や日本でまだ翻訳ないし紹介されていない『アユタヤ時代以前のチャオプラヤ川流域におけるタイ社会』を要約，紹介することにより，それが，タイの社会史ないし社会史一般にとってもつ意味を考えようとするものである。本書はタイ語で書かれており，それが重要な意義を含んでいても一般に理解されないおそれがあるため，こうした作業が必要と考えられる。

第二節　チット＝プーミサックについて

彼の著作は既に多くが日本でも出版・紹介されている。例えば坂本比奈子訳『タイ族の歴史』，田中忠治訳「タイ・サクディ・ナー制の素顔」（『タイのこころ』所収）などである。しかし，非常に重要な内容をもつ『アユタヤ時代以前のチャオプラヤ川流域におけるタイ社会』については，まだきちんとした紹介がなされていない。

チットプーミサック本人の生涯については，すでに紹介がなされているので，それらから概略を記しておくことにしよう（石井他編 1993:211-212；田中編訳 1975など）。1930年に東北部プラチンブリー県に官吏の息子として生まれ，50年にチュラロンコン大学文学部に入学して言語学・歴史学を学び，東南アジア古代史や語源学に業績を挙げる（「ピマーイ碑文」53年）。それと同時に学生会機関誌編集者としても活躍し，魯迅やマルクスを読みながら社会の腐敗を告

発する記事を書く。53年に共産主義者として無期停学処分になる。そのなかで唯物史観にもとづく「タイ・サクディ・ナー制の素顔」(57年) を執筆。58年には反共法により逮捕される。獄中で,『アユタヤ時代以前のチャオプラヤ川流域におけるタイ社会』のほか,『タイ,サヤーム,ラーオ,コームという語の起源とその民族的特質』,『忠誠宣誓式とチャオプラヤー流域史に関する新考察』という三大作が完成される。これについて坂本比奈子 (石井他編 loc.cit.) は,「獄中という環境で唯物史観と豊富な学識がみごとに合体した作品」と述べている。64年には無罪釈放されるが65年にはタイ国共産党に入党,翌年政府軍兵士に射殺された。こうした経歴は,反共産主義的軍政の長かったタイの歴史の中で,チットを特異な存在としている。こうした人物にタイの社会史がどのように映っていたかは,きわめて興味深い主題である。

第二章『アユタヤ時代以前のチャオプラヤ川流域におけるタイ社会』(要訳)

(以下で, [] 内の言葉は訳者注。また年号は,原文はすべて仏暦だが,以下では西暦に直してある。また,本稿で翻訳に使用したのは,Mai-ngaam 社が1983年に発行した版である。)

目次

一,考察の可能な範囲と限界
二,石碑のバイアス
三,史書をどう読むか
四,アヤタヤ時代以前の法
五,法についての理解
六,宮廷用語
七,史書と石碑に見られる痕跡
八,アヨータヤー・シーラーム・テープナコン
九,トライトルン市は伝説ではない
十,ナコンシータマラートとアヨータヤー
十一,ペチャブリー王国
十二,チャオプラヤ川流域についての争い

十三，クメールの変貌
十四，解放の流れ
十五，アユタヤ時代初期における政治哲学

一，考察の可能な範囲と限界

チャオプラヤ川流域のタイ社会は，1350年ウートーン王とともに始まると考えられてきた。しかし実際はそうではなかった。アユタヤは当初から発展しており，クメールを破る軍を出せるほどだった。

ただし，当時は国民国家が成立する以前であり，本考察は，全ての地方を考えに入れているわけではない。

二，石碑のバイアス

最も信頼のおける資料は石碑（silaachaluk）であり，史書（tamnaan, phonsaawadaan）は，信頼できないとされてきた。しかし，こうしていては，石碑をつくるスコータイやクメール以外の歴史は明らかにできないことになる。

チャオプラヤ川流域ではタイ紙の使用があった。例えば，裁判所の記録。北部タイでは石碑が人々の告知用に用いられたとしても，アユタヤでは紙（somut Thai）の使用が普通。

三，史書（tamnaan）をどう読むか

超自然的力や奇跡が書かれている。しかし，石碑でも同じで，王が出家のときに地面がゆれたなどと書かれている。けれども読み取るべきは，その当時仏教が盛んで王も出家するほどであったということ。

また，最初から最後まで超自然や奇跡ばかり，というわけでもない。特に信用できるのは，宗教史書。これは，モン＝ハリプンチャイの国家の記録である。しかし，スコータイ以前の記述が多いことから，信用されてこなかった。しかし，モン語の石碑と一致することがわかってきた。モン語文だけではなく，ワット・プラユーンのタイ語の宗教史書なども重要である。こういう史書は多数ある。今特に価値があると考えられるのは，ナコンシータマラートの史書。

史書の困難の一つは，地名の問題である。変名したり，消滅したりしてわからなくなる。例えば，Phamaa と Malaan Nakon と Phugaam は同じ土地を指しているなど。

四，アヤタヤ時代以前の法

アユタヤ時代以前の年号（1350以前）のついた法令がある。しかし，そこでの問題は暦。

第一に，同時代同一王朝で複数の暦が使われていた。大暦（Mahaasakkharat），小暦（Cunsakkharat），仏暦（Phutthasakkharat）。

第二に，しかも，数字のみが書いてあり，読む者は，状況からどれか判断しなければならない。

第三に，早数え，遅数えがあり，２～３年のずれがある。

ここで，十二支表記が助けになる（タイ，モン，ミャンマー，ラオス，クメールで使用）。

例えば大暦1205年ヤギ年（タイ文字創設），1207年イノシシ年（マハータート建設）。ヤギとイノシシは四年離れているのに，1205と1207は２年だけ。マハータートは早数えなら1209年だろうということになる。

仏暦は一年早い。それは，上座仏教の故地スリランカにならっているから。

目印になるのは，例えば，

輸出税法＝大暦1263年ヤギ年＝仏暦1886年ヤギ年＝西暦1343年。
奴隷法＝大暦1267年イノシシ年＝仏暦1890年イノシシ年＝西暦1347年。
借金法＝大暦1268年ネズミ年＝仏暦1891年ネズミ年＝西暦1348年。

これらはいずれもアユタヤ時代以前である。

五，法についての理解

年号は不正確。最もたしかなものは，社会の状態や心性。

例えば，アユタヤ時代以前は，目には目をというような同害報復であったが，アユタヤ以後は（殺人を除き）制限が加えられていく。スコータイ時代のタイ・ヨーノクの法でもやはり同害報復。

アユタヤ以前から使われていた法用語も多い。このことは，アユタヤ時代以前の法の水準の高さを示す。例えば証文（borikhon），書類（eekasaan），契約（sanyaa），保証（prakan），定年（kasian aayu），税（phikat）など。また，法のいいまわしとして，"Dek cet khaw,thaw cet sip"（子供七才，老人七十才）があるが，"khaw"はスコータイ時代の古いタイ語「歳」。

六，宮廷用語

アユタヤ時代以前のチャオプラヤ川流域のタイ王国を示すもう一つのものは宮廷用語である。スコータイ時代のラムカムヘン王碑文の記述は，宮廷用語がほとんどなく，1345年のトライプーミッカターのパヤールィータイの記述にも宮廷用語はあまりなかったが，1342年の輸出税法（アユタヤ時代以前のチャオプラヤ川流域）には，多数の宮廷用語が用いられている。

こうした宮廷用語は，アンコールトム時代のクメールからきている（Kham nap，Phadiang）。

それでは，アユタヤの史書には，なぜ1350年以前が存在しないのか。

それは，編年史が，王朝のことだけ記すものだからである。編年史（Phons aawadaan）という言葉は，天子の家系という意味。当時国民国家が成立していず，アユタヤ以外の都市（スコータイ，チェンマイ，ナーン，ハリプンチャイなど）を書こうとする意志がなかったからである。

七，史書と石碑に見られる痕跡

使用する史料は様々である。

1．セーンポム王の史書。

1297年にチェンライの王がサトーンの王に追われガンペンペットに行き，トライトルン市をつくったこと。

2．僧アノーマタッシー，僧スンマナテーンがアユタヤで学んだこと。

舎利塔ドーイステープの史書に，スコータイの王子二人が修行僧としてアユタヤにきた。

3．1324年にワット・パネンチューンの仏像を建てたこと。

占星術師の手紙のなかの記述。

4．アユタヤ軍がランプーンのパヤー・イーバー侯を助けたこと。

シンハナワット史書。

5．アユータヤー・シーラーム・テープナコンの記事

スコータイのラムカムヘン／パヤールェータイ（子）／パヤールィータイ（孫）の間に，アヨータヤー・シーラーム・テープナコンについての記述がある。

6．仏教史書の中のアヨータヤー

ラムカムヘン期のスコータイ朝の領土の記述の中に。

7．中国からの公式書簡におけるローフー

ローフー（あるいはラウォー）は，中国がアユタヤを呼ぶ旧名であるらしい。

八，アヨータヤー・シーラーム・テープナコン

アユタヤが建設される以前にトライトルン市から逃げてきたセーンポム王がテープナコンを造っていた。従って，ウートン王は，アユタヤ建設以前にアユタヤを支配していた。そのときのテープナコンの名が，1319年に記されるアヨータヤー・シーラーム・テープナコンである。

アヨータヤー・シーラーム・テープナコンとは，「アヨータヤー」と「ムアン・ラーム」の二つの名からなり，「アヨータヤー」は，現在のアユタヤ県ワットアヨータヤー，「ムアン・ラーム」は，現在のチャイナートである。

アヨータヤー・シーラーム・テープナコンは，チャイナートとワット・アヨータヤーの間にあったと考えられる。仮説としては，シンブリーの旧市であったと考えられる。

史書によれば，このテープナコンは，1319年に建設されたはずである。それ以前には，アヨータヤー，アヨーチャ，アヨーサと呼ばれる都市があったはずである。それも王都クラスの都市である。但しこれは現在のアユタヤ県と一致するとは限らないし，一箇所とは限らない。

九，トライトルン市は伝説ではない

1004年にチャイシリ侯がモン族とのスタマワディの戦いから逃げてガンペンペットの近くまで来てペーブ市にたどり着きトライトルン市を建設した。ペーブ市は，ハリプンチャイ・チェンセーンの芸術様式を残した古い都市。北部タイ人の南端となる都市。それより南は，ラウォー王国の領域。ペーブ市は，それ以前は，鉄製の焼きゴテを製造するタイ人の都市。

トライトルン市は，スコータイ時代にスコータイに攻められて領地となり，ガンペンペット市の衛星都市となる。現にスコータイの職人の手になる仏塔がある。

このように，トライトルン市の存在が実証されたことで，セーンポム王のテープナコン建設も，もはや「伝説」ではない。ただし，以上のことは，さらに検証が必要である。

十，　ナコンシータマラートとアヨータヤー

カモンデーンアン・マハーラート（大王）がタームポラリンを支配した（1182年）。彼はシュリヴィジャヤの王，少なくとも，ジャワ＝マレー系の王である。それは，マハーラートという敬称が示す。また，カモンデーンアンというのは，クメールの位階名である。これは，タームポラリンがチャヤワンマテープ七世の支配下にあったことを示す。

1218年に，クメールから三人のチャオナーイ（領主）がやってきた。彼らは，シュリヴィジャヤの血をひいていた。その一人シータマラート侯がタームポラリンの王となった。その時からシュリヴィジャヤ式の「マハーラート」をやめ，「シータマラート」を使うようになった。シータマラート侯は，スリランカ＝モン式の上座仏教を信じ，その様式で仏塔の建設を行った。この頃からシータマラートの名が，スコータイなどインドシナ全体に知れ渡る。

1230年に弟チャンタラパーヌがシータマラート侯に即位。彼は1246～1250年に二度スリランカに出兵，タミル王国などと協力するが達せず。

1256年にスコータイのローチャラート王がマレー半島にまで勢力を伸ばし，タームポラリンを従える。その結果，多くの仏像と高僧がスコータイに移る。その頃すでに，ナコンシータマラートと呼ばれていた。

チャンタラパーヌの死んだ1264年から1297年までは，ナコンシータマラートは，王家がばらばらになった。1277年頃から回復し始めるが，スコータイ，アヨータヤー，ジャワこの三者に税を渡す。このときから，アヨータヤーと直面する。

当時のナコンシータマラートには，抵抗する力がなかった。12の市を治めながら，アヨータヤーに税（suai）を送る。その代りに，ウートン王も，仏塔の建設などに協力した。一方でジャワも攻めてくる（1275年）。数次にわたる攻撃に耐え，税を送るだけでよいこととなる（1293年）。さらに，英雄ポンパガーン（牛飼いの子らのリーダー）がでて，スコータイ・中国と協力してジャワを追い出す 1295年）。

1297年スコータイのラムカムヘン大王の時代のおわりとともに，アヨータヤーがやってきて，すべてをアヨータヤーに強制移住させ，ナコンシータマラート王国は滅びる。

（1707年にビルマがアユタヤに，1728年にタイがヴィエンチャンにしたように。）

もうひとつの問題は，ウートン王の問題。1350～1369年にアユタヤ朝にいた

ウートン王が，なぜ1277年に登場できるのか？

論点１：同じ名前を継承する伝統が，タイにはある。

論点２：ウートン王は実際２，３人いて，少なくとも次のように系譜が書けると考えられる。

第一代　ピチャイテープチェンパワー王

第二代　ウートン王（祖父）　（ナコンシータマラートを制圧。）

第三代　セーンポム王　（トライトルン市から逃亡。）

第四代　ウートン王（ラーマティボディー世）　（アユタヤを建設。）

十一，ペチャブリー王国

1294～1318年の間に，ペチャブリー王国が，アヨータヤーの兄弟都市として生まれる。王プラパノムタレー・シーサワット・マヘンサーティラートは，ウートン王（祖父）の王子。

1294年に中国の宮廷に大使を送り，外交的承認を要請。中国では，「国」(prathet) ではなく，「城市」(nakhorn) と呼ぶ。

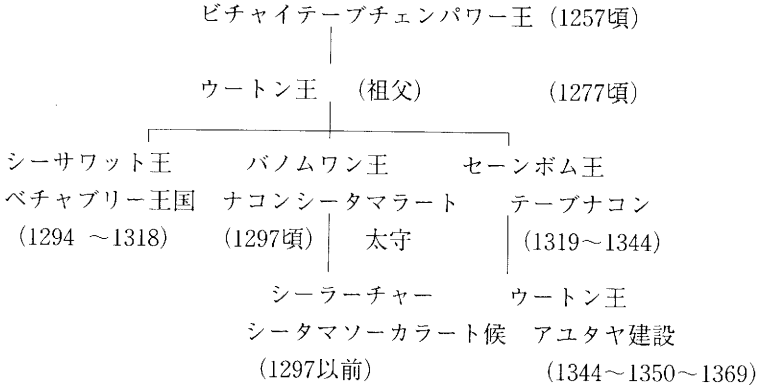
シーサワット王は，安定後，弟プラパノムワンと甥のシーラーチャーを送ってナコンシータマラートの領域を支配させる。南部一帯がペチャブリー王国の下に置かれる。

1297年の後，シーサワット王は，義兄をプレーク市に送り，スコータイの端チャイナートにまで勢力を伸ばした。

称号としては，シャイレンドラ朝シュリヴィジャヤのシーラーチャー，シーマハーラーチャー等を使う。それは，大乗仏教のタミル・マレー地域も治めるためであった。

シーサワット王は，中国の皇帝の娘を本妻に迎えたという。しかし，チャオプラヤ川流域にはこの種の話が多く，検証が必要。

（図一） アユタヤ時代以前のチャオプラヤ川流域におけるキョウダイ／シンセキ関係



十二，チャオプラヤ川流域についての争い

1250～1300年くらいのアユタヤの政治を振り返る。

その当時，二つの王家の間で権力争いがある。

A. ラーム王家の系列。ラーマーティボディ，ラーメースアン，パヤーラームなどの名を用いる。アユタヤを本拠とする。例えば，プララーマーティボディ一世（ウートン王）。

B. イン王家の系列。インタラーチャー，チャオナコンイン，バロムラーチャーティラートなどの名を用いる。スパンブリーを本拠とする。

そこでは，アユタヤのサクディ＝ナー統一国家はまだできていない。チャオプラヤ川流域は，大小様々の自由な都市国家があり，きょうだい関係（Phii noong），親戚関係を結びながら存在していた。ペチャブリー，トライトルン，アヨータヤー，シーラームテープナコン，ラウォー，チャンタブリーなどなど。

これは，古いタイ社会の特徴。現在の中国のシプソンパンナー（十二の千の田），ベトナムの白タイ一黒タイ，ミャンマーのチャーン，ラオスのシプソンチュタイにも見られる。

また例えば，ロイエットは百一の王という意味。中にはカレン族の王もいた。

十三，クメールの変貌

クメールの史書は，1352年前後にアユタヤのタイ軍がシーヤソートプラ（ナコン・トム）を攻撃したことを記している。それは，クメールが「変貌」したからだ，という。

チャヤワンマテープ七世（1181～1228年）の時代，ミャンマー，ジャワ，ベトナムに至る支配を確立しており，タイ族の地域でも，北はスコータイ，ヴィエンチャンから南はチャイヤー，チャンタブリー，西はカンチャナブリーに至るまで支配していた。ということは，既にシーヤソートプラ攻撃前にクメール軍をチャオプラヤ川流域から追い払った勢力がいる，ということを示す。これが「変貌」の意味ではないか，という仮説を呈示することができる。

十四，解放の流れ

チャヤワンマテープ七世時代に奴隷化されたミャンマー人，ベトナム人，タイ人，ラオス人，マレー人は，建設や彫刻などに使われた。

チャヤワンマテープ八世時代に権力を彩っていたのは，バラモン教と大乗仏教。例えばワンマは南インドのバラモンの家系である。ナコン・トムの仏教は戒律が緩い。また薔薇モン教のような神がいる。一方で，その時既に民衆（ないし奴隷）には，上座部仏教が入っている。それは，僧の呼び方（cao kuu）からして，スコータイ，モーンから入ったものである。けっして偶然ではなく，スコータイの独立の動きなどと関わっている。チャヤワンマテープ八世（1243？～1295年）時代には，ナコン・トムはタイ軍の攻撃を受けている。

スコータイの解放：バーンヤーン市の王バーンクラーンと，ラート市の王パームアン大王が協力してスコータイからクメールを追い出し，バーンクラーン王がスコータイの王として即位し，シーインタラボディンサーティトとなる。パームアン大王は，カモンデーンアンの称号を受ける。

ラート市の解放：スコータイの解放戦争にラート市のパームアン大王が手助けした。とすればラート市も既に独立していたのではないか。そもそもラート市とはどこか？Ankhor Rat ＜ Nakhorn Rat ＜ Korat と考えれば現在のコラート（ナコンラーチャシーマー）市と考えることができる。

ラート市もチャンパ（ベトナム）と同じ頃（1220年），クメールから独立したと考えられる。スコータイが独立してからは，キョウダイ関係を結ぶ。

十五，アユタヤ時代初期における政治哲学

最初期は，キョウダイ関係にある諸都市の時代。これはイン系の政治哲学。

次の時期は統一性をもったサクディ＝ナー国家の創設。小国の統廃合が行われる。これがラーム系の政治哲学。

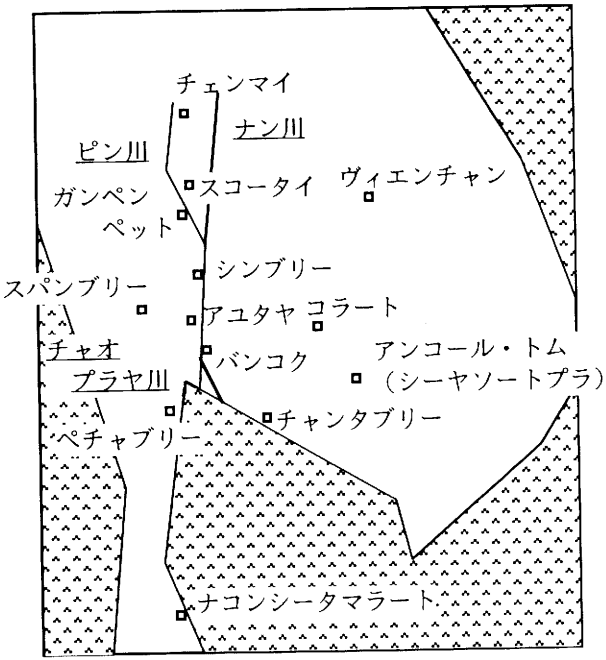
イン系は，発音からして，ラオス以北から来た。そこでは，諸都市の関係しあう社会。諸都市は「主人 cao」と「奴隷 thaat」ではなく「友人たち mitrasahaai 」として存在する。最高の理想は，団結（saamakkhii)。同じ血統にある諸都市の間の争いを避けること。

また，山王信仰（latthi cao phukhao）があった。インドラ神は，バラモン教によればヒマラヤ山（世界の中心シュメール山）にいる。したがって，中心となる都市は，この山を必要とする。その一つの方法は，町の中心にシュメール山の模型を造ること。例えば，チェンラーイのチョームトーン山。ジャワ，マレー半島でも同様。その他，ナコンパノムのパノム，ラウォー市のラウォーも，それぞれ古クメール語，モン語の「山」。アユタヤにも黄金の山と名付けた仏塔がある。

ラーム系は，奴隷制社会の英雄ラーマ。インドでは，タミル系を奴隷としたアーリアンである。インドシナでは，森の民を奴隷化したクメールの支配者である。「主人 naay」，「征服者 phu phichit 」がキーワード。（それに対し，イン系では「指導者 phu nam」「頭 hua naa」がキーワード）キョウダイ関係都市だけでは外敵から守れないので，発展したと考えられる。

アユタヤの初期は，両系統が争っていたが，クメールとの対抗上連帯した。その中で，ラーム系の優位するサクディ＝ナー統一国家の形成に向かって行く。

（図二）文中の主要な地名とその所在地



第三章　若干の考察

以上要訳してきた，チット＝プーミサック『アユタヤ時代以前のチャオプラヤ川流域におけるタイ社会』について，若干の考察を加えておこう。

第一節　歴史書としての本書の意義と限界

本書は論述の実に半分近くが資料論，資料批判にあてられており，きわめて堅実，実証的な歴史研究であるということができる。

しかも，その資料批判に基づき，これまで顧られることのなかった資料を用いて，新しい事実を描き出したのは重要である。そして，スコータイ朝，アユタヤ朝，バンコク朝という王統譜として描かれがちなタイの歴史について，それとは異なる流れ，すなわち，スコータイ朝と同時期にチャオプラヤ川流域や

マレー半島にいたタイ族の状況を描き出したことは興味深い。一団となって南下してきたように語られることの多いタイ族が既に以前からマレー半島からチャオプラヤ川流域に至るまで他の民族と混在していたと主張することで，これまでのイメージを一新したともいえる。

そのなかで課題として残された点をあえて指摘すれば，タイ語の様々な史書（スコータイ，ナコンシータマラート，ペチャブリー，など）の照合及びクメール語資料及び若干の中国語資料との照らしあわせによって論述がなされているが，他の関連地域，例えばランナー・タイ語，ミャンマー語，モン語文献との照らし合わせが不十分であるように思われる。中でもとりわけ重要なのはモン語文献である。モン族は，タイ族以前にチャオプラヤ川流域に文明をきづいていた民族であり，ウートン王による建設以前のアユタヤを知る上できわめて重要な手がかりを提供する可能性がある。即ち，タイ族がアユタヤ／アヨータヤーにやってくる以前に，モン族が既に同地域に都市を建設していた可能性がある。もしそういう都市があれば，そこにタイ族がやってきて武力ないしは平和的に占拠してしまい現在のアユタヤを造ったという可能性は少なくない。そのことについては，チット＝プーミサックは，殆ど語っていない。彼にとっては，あくまで，タイ族が住むアユタヤ／アヨータヤーが重要なのである。

第二節　タイ社会の理解にとっての意義

本書の中で，タイ社会の理解にとってきわめて重要な意義を持っているのは，ラーム／インという対立図式である。一方は「征服者phu phichit」「支配者cao naai」と「奴隷 thaat」の関係であり，アユタヤ朝サクディ＝ナー国家を造っていく原理であり，他方は，自由で独立した諸都市のキョウダイ・シンルイ関係からなり，リーダーは単に「指導者phu nam」としてのみ存在する，という原理である。これは，異民族との関係／タイ族同志の関係といってしまうことはできない。というのは，タイ族同志でも，スコータイとタームポラリンのように征服／被征服というラーマ的関係である場合があるし，アユタヤ以前のチャオプラヤ川流域には，タイ族だけではなく，カレン族，モン族，ラオス族などもいて，それらのつくる都市も，このイン的な関係の輪に入っていたからである。

こうした階級支配的な原理と自由な対等性の原理という対立図式は，その後の歴史展開，および現在のタイ社会を捉える上でも重要であると考えられる。

アユタヤ期やラタナコーシン期に，あるときはサクディ＝ナーの形あるときは近代的な軍政の形をとって成立する階級支配的な社会の仕組みが，タイ社会にとって，決して唯一の本来的な構成原理であるわけではなく，それとは対立する，自由で独立した諸集団の連帯性という原理が存在するということは，議会政治の場面で，あるいは組合その他の社会運動の場面でしばしば見られるからである。

第三節　チット＝プーミサックという人物を理解する上での意義

坂本比奈子は，三大作を評して，「唯物史観と豊富な学識がみごとに合体した作品」といった（石井他編 1993）が，本書に関する限り，「サクディ＝ナー制の素顔」のように「唯物史観」・「階級闘争」のアイディアに基づいているとみるのは難しい。図式によらない実証主義的な記述がその本筋をなしている。強いていえば，「クメール帝国からの奴隷の解放」や「自由な諸都市の連帯」という発想がマルクスの考え方にヒントを得ているといえなくもない。しかし，それもかなり強引な読み込みといわざるを得ない。

むしろ逆に，本書が示しているのは，チット＝プーミサックの民族主義的な面である，と主張することも不可能ではない。というのは，第一に，アユタヤやナコンシータマラートのことを扱う場合に，彼が一貫して「タイ族」に限って取り扱い，それ以外の民族による建設には殆ど注意を払っていないからである。第二に，第十四章が示すように，クメール帝国の支配からの独立の過程について，詳細に記述するなど，タイ族の独立を描くことに熱意が注がれているからである。

三大作のもう一つ『タイ，サヤーム，ラーオ，コームという語の起源とその民族的特質』において，「タイ」と「サヤーム」という語の意味の違いを明らかにする際に，前者が「自由人」としての意味をもち，後者が「奴隷」というニュアンスを持つ他称であることを強調している。このことも，タイ族の「自由独立」ということに関心をもっていたからである，ということができ，本書におけるタイ族の独立への関心という民族主義的な部分を裏付けている。

もちろんこのことが，彼の業績の価値を下げるわけでも上げるわけでもない。しかし，彼という人物を理解するにあたっては，「民族主義者」という面をも十分ではない，というのがここでの主張である。

さらにいうならば，「民族主義」というのでも十分ではない。ここでは，彼

が，別の著作でサクディ＝ナー制について行っていた痛烈な批判を考えると，本書では，サクディ＝ナー制へのオルターナティヴが呈示されている，と見ることができる。つまり，それは，ラームに対立するところのインの原理，つまり，自由な諸都市がキョウダイ・親類関係によって調和し連帯する，という原理である。ここに，彼に固有の自由主義をも看取することができる。

結　び

本稿では，チット＝プーミサックの『アユタヤ時代以前のチャオプラヤ川流域におけるタイ社会』を翻訳，要約，紹介し，若干の考察を加えたが，その結果，本書が，本稿よりもさらにきちんとした翻訳と紹介を必要とする重要な文献であることが明らかになった.

またそればかりではなく，階級支配の原理と自由な対等性の原理というタイ社会の対立軸，チット＝プーミサックの非マルクス主義的・民族主義的ないし自由主義的側面という仮説も呈示された。以後に残された課題は，第一に，モン語を始めとする関連諸族の文献との照合による本書の記述の検証と展開，第二に，他の時代や現在におけるラーム／イン仮説の検証，第三に，彼の他の著作との照合による「民族主義的側面」・「自由主義的側面」の策出，という作業であろう。

《参考文献》

石井米雄他編　1993　『タイの事典』同朋舎。

Phumisak,Chit, 1983 *Sangkhom Thai Lum Mae Nam Cao Phrayaa Koon Samai Sri Ayuthayaa,* Samnakphim Mai-ngaam

————, 1976 *Khwam Pen Maa Khong Kham Sayaam Thai Laao Le Khoom Le Laksana Thaang Sangkhom Khong Chuu Chonchaat,* (坂本比奈子訳『タイ族の歴史：民族名の起源から』井村文化事業社。)

田中忠治編訳　1975『タイのこころ』めこん。